

「行卷」大行釈引文の研究

——善導引文——

貫 名 讓

一

親鸞の大行觀を窺つていく上において、その特徴が顕著に見られるのが『教行信証』の「行卷」である。故に、多くの先哲によって学究がなされてきた。私自身もこれまで、「行卷」「信卷」を中心に親鸞の念仏思想を問題にしてきたが、小論においては、「行卷」に示される「大行としての称名」の意義を、大行釈の善導引文から考察してみたいと思う。

二

先ず『教行信証』「行卷」に明かされる大行とは如何なるものかを、出体釈から称名破滿釈まで見ておきたいと思う

つつしんで往相の廻向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とはすなはち無碍光如来の名を称するなり。この行はすなはちこれ⁽¹⁾もろもろの善法を攝し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。ゆゑに大行と名づく。

ここにおいて親鸞は、「大行とはすなはち無碍光如来の名を称するなり」と示しているのみである。衆生の獲信といった心相は一切示されていない。称名それ自体のはたらきとして示されているのが、「行卷」出体釈において明かされる親鸞の大行觀なのである。⁽²⁾

そして次に『大經』の諸文が引かれる。ここには、阿弥陀仏・諸仏（釈迦仏）・衆生の關係が示されている。阿弥陀仏の願心は、諸仏の称名を介して衆生界に現れ来たり、衆生に聞名せしめるべくしてはたらく。諸仏の称名とは、諸仏による弥陀讃嘆であると同時に、衆生への弥陀法の説法となる。言い換えれば、諸仏は弥陀法を衆生に聞かしめるべくしてはたらく。それが「諸仏の称名」である。そして衆生にとつては、この称名を「聞く」縁に出遇う。ということが『大經』引文から見えてくる内容である。⁽³⁾第十八願の法が称名を通して衆生の前に明らかになる。そのことが「行卷」に示される称名の特徴なのである。従つて、如何に聞き信じたらいいかとい

う衆生の心相は、「行巻」において語られる称名のはたらきとは別の問題として考えるべきである。

以上の流れを受けて、

しかれば、名を称するに、よく衆生の一切の無明を破し、よく衆生の一切の志願を満てたまふ⁽⁴⁾。

と、大行としての称名であるからこそ、衆生の一切の無明を破し、志願を満たすのであると示されるのである。この称名破満積は、曇鸞の『論註』の影響を受けているのは確かであるが、曇鸞は衆生の信を問題にしているのに対し、親鸞は称名そのもののはたらき（特性）を語っているものであって、曇鸞と親鸞の理解を区別しなければならない。曇鸞は称名を語る上において、衆生に真実信があるかないかを問題にしており、これを親鸞は「信巻」において引用している。このことから「行巻」称名破満積においては、衆生の信を前提とした称名について示されているのではなく、あくまで称名そのもののはたらきが示されていることが明らかとなる⁽⁵⁾。

この後、七祖の文が引用される。七祖全体を通して見えてくるのは、念仏（称名）のはたらきとその継承、そして勧めである。そのことを今回は善導引文に焦点をあてて考察していきたい。

三

「行巻」大行釈には、十個の善導の文が引かれる。

- ①礼讃（前序 一行三昧）、②礼讃（日没讃）、③礼讃（初夜讃 大経礼讃）、④礼讃（後述）、⑤礼讃（後述）、⑥玄義分（弘願釈門）、⑦玄義分（六字釈）、⑧観念法門（撰生縁）、⑨観念法門（証生縁）、⑩般舟讃（釈迦教・勧誡 正報讃）

この中、諸師が特に問題視されているのが第一引文と第六・七引文である。原文と「行巻」の文とを比較してみたい。

【善導】

問ひていはく、一切の諸仏三身同じく証し、悲智の果円かにしてまた無二なるべし。方に随ひて一仏を礼念し課称せんに、また生ずることを得べし。なんがゆゑぞ、ひとへに西方を歎じて、勧めて礼念等をもつばらにせしむるは、なんの義かあるや。答へていはく、諸仏の所証は平等にしてこれ一なれども、もし願行をもつて来し収むるに因縁なきにあらず。しかるに弥陀世尊、本深重の誓願を発して、光明・名号をもつて十方を摂化したまふ。ただ信心をもつて求念すれば、上一形を尽し下十声・一声等に至るまで、仏願力をもつて易く往生を得。このゆゑに釈迦および諸仏勧めて西方に向かはしむるを別異となすのみ。またこれ余仏を称念して障を除き、罪を滅することあたはざるにはあらず、知るべし。

もしよく上のごとく念々相続して、畢命を期となすものは、十はすなはち十ながら生じ、百はすなはち百ながら生ず。なにももつてのゆゑに。外の雜縁なくして正念を得るがゆゑに、仏

「行卷」大行釈引文の研究（貫名）

の本願と相応することを得るがゆゑに、教に違せざるがゆゑに、仏語に随順するがゆゑなり。⁽⁶⁾（波線は筆者付す）

【親鸞】

問うてはいはく、一切諸仏、三身同じく証し、悲智果円にしてまた無二なるべし。方に随ひて一仏を礼念し課称せんに、また生ずることを得べし。なんがゆゑぞひとへに西方を嘆じてもつばら礼念等を勧むる、なんの義かあるやと。

答へてはいはく、諸仏の所証は平等にしてこれ一なれども、もし願行をもつて来し取むるに因縁なきにあらず。しかるに弥陀世尊、もと深重の誓願を發して、光明・名号をもつて十方を攝化したまふ。ただ信心をして求念せしむれば、上一形を盡し、下十声一声等に至るまで、仏願力をもつて往生を得易し。このゆゑに釈迦および諸仏、勧めて西方に向かふるを別異とすならくのみ。またこれ余仏を称念して障を除き、罪を滅することあたはざるにはあらざるなりと、知るべし。もしよく上のごとく念々相續して、畢命を期とするものは、十即十生、百即百生なり。なにをもつてのゆゑに、外の雜縁なし、正念を得たるがゆゑに、仏の本願と相応することを得るがゆゑに、教に違せざるがゆゑに、仏語に随順するがゆゑなり。⁽⁷⁾（波線は筆者付す）

波線の部分に注目してみると、原文では衆生の信心が問題にされているのに対し、親鸞は読み換えることによつて、阿弥陀仏のはたらきとして示している。これについて諸師の見解を参照すると次の通りである、

【大江淳誠】

：「使」という字があつても、使役の助動詞と違うので、これは置き字で「助字」という。：真宗の不行とは何か、阿弥陀如来の力である。それは何か、光明・名号である。こういうことをだしてある。不行というものは光明・名号である。従つて我々は信ずるだけだ。ただ信心求念する。「せしむ」というでも、これは使役の助動詞と違う。ただ信心求念、信心も求念も同じこと、信ずるということです。：私達は信ずるだけではない。よくこの「使」の字をまちがえる人がある。使役の助動詞とみて、「信心求念せしむ」というと、阿弥陀如来が我々を信じさせるというふうにとる。この「使」の字は、今はそういうたのではない。⁽⁸⁾

【山邊習學・赤沼智善】

：衆生の迷いの闇を拂い、冷い心を温めて下さる光明の縁と、諸佛に讃められて十方衆生に知らせんとの名號の因を以て、十方の衆生を化益し給うのである、それであるから、そのまま救うぞと仰せらるる名號の謂れを聞く者は、如来の御慈悲を有難く信じて、御恩を思い、往生を願ひ、命長らえば一生の間、報謝の稱名を唱え、もし短い命ならば、十聲でも、一聲でも唱えるならば、佛の本願他力によりて、たやすく往生することをするのである。⁽⁹⁾

【星野元豊】

：弥陀は諸仏にすてられた罪業深き衆生を救わんとする深重の誓願を發して、光明無量の働きで十方衆生を照し、名号をもつて十方に響流して呼びかけたもうて、この光明名号の働きで十方

世界を化益なされているのである。そしてこの名号を頂く信心一つで救われるという第十八願を成就されたのである。⁽¹⁰⁾

【岡亮二】

…どのようにして十方の衆生を救おうとされているのか。それは「ただ信心をして求念せしむ」なのです。すなわちその光明と名号の大悲でもって、衆生には信心を生ぜしめ、その信を因として往生せしめようとされているのです。阿弥陀仏は衆生に往生を願わしめて、その衆生を攝取しようとされているのですね。だからこそ本願を信じ称名した者は、誰でも必ず浄土に往生せしめられることになるのです。⁽¹¹⁾

大江・山邊・赤沼・星野の各師においては、光明名号のはたらきを受けとめる衆生の信心（心相）が重要であると示されている。それに対し、岡師は阿弥陀仏が衆生を往生せしめようとしてはたらくそのはたらきとして示されている。いずれも第一文に重要な意義を見ているのは共通しているが、その解釈には大きな差異がある。親鸞がわざわざ読み換えてまで示さんとした意図を汲むならば、弥陀のはたらきとして読むべきであると考ええる。

四

次に第六・七引文を窺ってみたい。

【善導】

弘願といふは『大経』に説きたまふがごとし。「一切善惡の

「行巻」大行釈引文の研究（貫名）

凡夫生ずることを得るものは、みな阿弥陀仏の大願業力に乗じて増上縁となさざるはなし⁽¹²⁾」

（いまこの『観経』のなかの十声の称仏は、すなはち十願十行ありて具足す。いかんが具足する。）「南無」といふはすなはちこれ帰命なり、またこれ発願回向の義なり。「阿弥陀仏」といふはすなはちこれその行なり。この義をもつてのゆゑにかならず往生を得⁽¹³⁾。

【親鸞】

またはいはく、「弘願といふは『大経』の説のごとし。一切善惡の凡夫、生ずることを得るは、みな阿弥陀仏の大願業力に乗（乗）の字、駕なり、勝なり、登なり、守なり、覆なり」じて増上縁とせざるはなし」と。

またはいはく、「南無といふは、すなはちこれ帰命なり、またこれ発願回向の義なり。阿弥陀仏といふは、すなはちこれその行なり。この義をもつてのゆゑにかならず往生を得⁽¹⁴⁾」と。

先ほどと同様に諸師の見解は次の通りである。

【山邊習學・赤沼智善】

上は第十八願の意を説示したが、その體は何かと言えば南無阿弥陀仏の名號のほかはない。即ち南無は歸命と譯す。我々凡夫が如來の仰せに従うことである。御助けを信ずることである。又この南無は發願廻向の意味がある。これは我々凡夫の方から云えば、如來の仰せに従いて、浄土へ生れんと願うところである。如來の方から云えば、我々凡夫に功德の寶を與えてやりたいと御願いになる真心である。次に阿弥陀仏というは、我等凡夫の浄土へ往生する所の行である、正定の業因である。かよう

「行巻」大行釈引文の研究（貫名）

に南無の願と、阿彌陀佛の行とが、一名號の中に具足しているから、この名號一つを頂くことによりて、必ず極樂淨土へ往生することを得るのである。⁽¹⁵⁾

【星野元豊】

：「弘願というは大經の説のごとし」と「南無というは即ちこれ帰命なり」の二文はまさにこの宗と体を示したものと見えよう。すなわち弘願といったものは仏の本願そのもので經の宗であり、南無阿彌陀仏の名号は經の体を示したものである。仏の弘願のはたらきはそのまま私の南無のはたらきとして名号としてはたらくのである。南無阿彌陀仏という名号の具体的なすがたを分析してみれば、南無というのは私が仏の仰せに従うことすなわち帰命であり、この帰命はほかならぬ弥陀の發願回向のはたらきが私にはたらいたものである。弥陀の撰取のはたらきが私の上にはたらくとき、私の帰命のはたらきとなるのである。阿彌陀仏というのは仏のこの撰取のはたらきの行そのものにほかならない。それだから必ず往生することができるのである。⁽¹⁶⁾

【岡亮二】

：「行巻」に示されている親鸞の解釈は：衆生が阿彌陀仏に対して南無する、そのような南無阿彌陀仏が問題になっているのではなくて、南無阿彌陀仏とは、本来的には阿彌陀仏ご自身が「南無」されている相であることを、親鸞聖人はこの善導引文を通して示されているのだと、私たちは窺わねばならないのです。：「南無とは帰命という意味であり、また發願廻向という義が含まれている。阿彌陀仏というのは、阿彌陀仏自身が南無

されている、その南無が行として衆生に來たっている相である。それ故に衆生は、この南無阿彌陀仏を信じるその時、必ず往生することができるのである」と。⁽¹⁷⁾

ここにおいても、山邊・赤沼・星野の諸師は、衆生の心相でもって捉えられるのに対し、岡師は南無を行として捉え、阿彌陀仏のはたらきでもって捉えるべきであると示されている。私は、先ほどの第一引文と同様、「行巻」において親鸞は称名そのものはたらきを明らかにしているのであるから、いたずらに衆生の心相を差し挟むべきではないと考える。

五

善導引文において親鸞が明らかにしたかったことは何であつたのか。善導の意を入れながら読むのではなく、「行巻」に引かれた文を、その文意にそつて読んでみると、阿彌陀仏の願い・諸仏の勧めとして語られている「大行としての称名」のはたらきが示されていることが明らかとなる（衆生の聞き方・信じ方は、ここでは問われていない）。それを立証すべく、十個の引文の内容を整理してみたい。

① 称名の意義を明かす

阿彌陀仏の名号を称えることを勧める。それは阿彌陀仏の願いが具わつたものであり、阿彌陀仏は称名を通して衆生を摂化しようとするからである。故に釈迦仏（諸仏）は阿彌陀

仏の願いのままに称名の徳を説き示すのである。

② 阿弥陀仏のはたらき

阿弥陀仏の光明の特性が示される。

③ 阿弥陀仏のはたらき

阿弥陀仏の名号のはたらきが示される。阿弥陀仏の名号は、それを聞いて往生したいと欲ったものは、全て浄土に往生せしめるはたらきがある。故にただひたすら阿弥陀仏名を聞けと勧めている。

※ここは、阿弥陀仏の名を聞くことが勧められている（第十八願の法の内実が説き勧められている）のであって、如何に聞き信じるかという衆生の聞き方は示されていない。

④ 善知識のはたらきと聞名

凡夫が如何にして阿弥陀仏の法と出遇うのか。第十八願の法を説き示す諸仏・善知識のはたらき（第十七願の内容）が示されている。

⑤ 念仏の利益

念仏には、衆生の様相を一切問題にすることなく、阿弥陀仏の教えを信じ名を称える者（一念に至るまで）をして、浄土に往生させる利益がそなわっている。

⑥ 阿弥陀仏の願い

それは阿弥陀仏の願いそのものに他ならない。大願業力を増上縁とする以外にはない。

⑦ 南無阿弥陀仏とは

南無阿弥陀仏とは、正に阿弥陀仏の願いの具現相である。故に、南無阿弥陀仏とは、阿弥陀仏から衆生に関わりきたる相である。

⑧ 阿弥陀仏の法

第十八願の内容が説示されている。

⑨ 諸仏の証明

諸仏による弥陀法の称讃と説示が示されている。

⑩ 称名のはたらき

阿弥陀仏の名号を称えること、すなわち称名には、どのようなはたらきがあるかが示されている。

以上のことから、善導引文は衆生の心相としての称名（南無阿弥陀仏）が示されているのではなく、阿弥陀仏・諸仏（釈迦仏）等の説示としての称名のはたらきが示されていると見るべきである。阿弥陀仏の願心である名号が、称名を通して衆生に関わりきたることが述べられているのである。これは他でもない「行巻」全体を通して語られる大行としての称名の特性でもある。

1 『真宗聖教全書（以下、真聖全）Ⅱ』五頁。

2 拙論「親鸞の称名観」（『印度學佛教學研究』第四三卷第一号

「行卷」大行釈引文の研究（貫 名）

- 一九九四年）参照。
- 3 拙論「行卷」大経引文の一考察」（『宗学院論集』第七十一号一九九九年）参照。
- 4 『真聖全Ⅱ』八頁。
- 5 拙論「行卷」称名破満釈にみる親鸞の大行観」（『印度學佛教學研究』第四十二卷第一号一九九三年）参照。
- 6 『浄土真宗聖典 七祖篇（註釈版）』六五七頁。
- 7 『真聖全Ⅱ』一九頁。
- 8 大江淳誠『教行信証講義録 上巻』永田文昌堂、一九八三年、一七二～一七五頁。
- 9 山邊習學・赤沼智善『教行信証講義 教行の巻』法蔵館、一九五一年、二六四頁。
- 10 星野元豊『講解 教行信証 教行の巻』法蔵館、一九七七年、二二四頁。
- 11 岡亮二『教行信証口述50講 第一巻 教・行の巻』教育新潮社、一九九三年、二五五頁。
- 12 『浄土真宗聖典 七祖篇（註釈版）』三〇一頁。
- 13 『浄土真宗聖典 七祖篇（註釈版）』三二五頁。（ ）の中の文言を親鸞は引用していない。
- 14 『真聖全Ⅱ』二二～二三頁。
- 15 山邊習學・赤沼智善 前掲著 二八〇頁。
- 16 星野元豊 前掲著 二四三～二四四頁。
- 17 岡亮二 前掲著 二七五頁。

〈キーワード〉 親鸞、『教行信証』、行卷、善導引文

（大阪大谷大学短期大学部教授）

新刊紹介

中西 随功 監修

『證空辞典』

A五版・二九四頁・本体価格四、三〇〇円
東京堂出版・二〇一一年七月